

対談

「2020年東京オリンピック・パラリンピックと総合型クラブ」

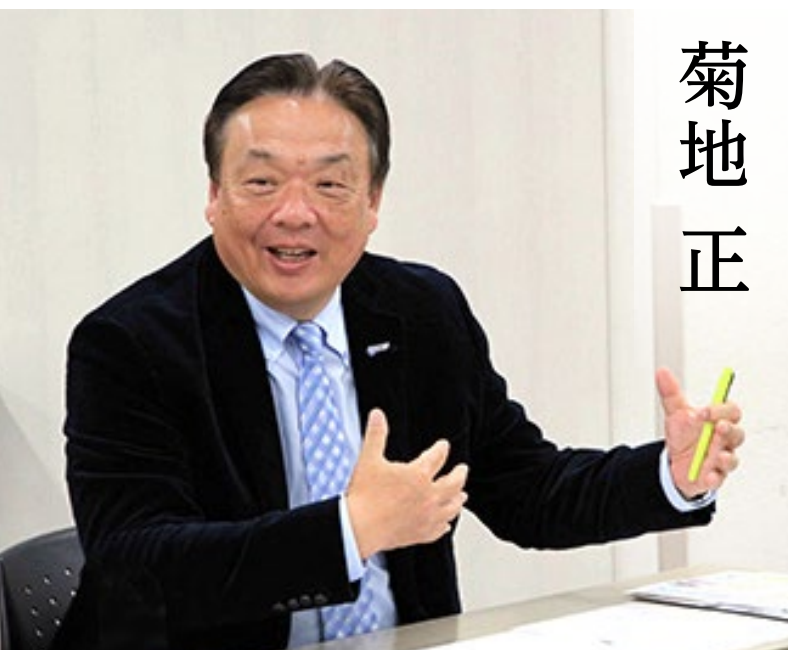
1 「オリンピック・パラリンピック」の魅力と 1964年東京オリンピックの思い出

昨年(2013年)に2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定しました。この出来事は、日本中に大きな感動と喜びを与えると同時に、「2020年に向けて日本のスポーツ界はどうあるべきか」という問いがスポーツ関係者に与えられたといえるでしょう。その問いの1つとして、「総合型クラブをはじめとする地域スポーツはオリンピック・パラリンピックとどのように関わることができるのか」ということも挙げられます。そこで今回、2020年東京オリンピック・パラリンピックと総合型クラブとの関係性について、識者の方々に話を伺いました。

対談者

師岡 文男 氏 [上智大学文学部教授(保健体育研究室長)]

菊地 正 氏 [NPO法人高津総合スポーツクラブSELF 副理事長]

菊地
正師岡
文男

「オリンピック・パラリンピック」の 魅力とは

師岡(敬称略) オリンピックの1番大きな魅力は、200を超える国と地域

の人々が同じ場所に一堂に会し、その様子を世界中の人々がリアルタイムで見ているイベントであるという点です。これは国連総会でも成し得ていないことです。オリンピックでは、これまで名前も聞いたことがないような国も参加しています。「世界にはこれだけ多くの国や地域があるのだ」ということを多くの人が実感でき、特に開会式では一つの国に平等にスポットライトが当たる唯一無二な世界一のイベントである点がオリンピックの最高の魅力といえるでしょう。

2つ目の魅力は、世界中の人々がスポーツを通して、感動や喜びを共通体験するという点です。スポーツには「見る」「見る」「支える」といった様々な形で関わることで、世界中の人々が競技者としてだけでなく、観戦する人、支援する人など多様な形で自分の生活に関連付けながらオリンピックを味わうことができます。

さらに、パラリンピックについて言えば、「パラリンピック」という言葉は、実は1964年の東京大会の際、日本人が考えたものです。『オリンピック憲章』にはオリンピックの根本原則として、「スポーツを行うことは人権の一つである。すべての個人はいかなる種類の差



別もなく、オリンピック精神によりスポーツを行う権利を与えられなければならず、それには、友情、連帯そしてフェアプレーの精神に基づく相互理解が求められる」と書かれています。オリンピックの実現の意味でも、パラリンピックはオリンピックとセットで開催されることに意味があるのです。障がい者スポーツの現状に目を向ければ、まだまだその環境が整備されていない状況です。今回、56年ぶりにパラリンピックが開催されることで、多くの方々に障がい者スポーツに関心を持っていただけなきっかけになることは3つ目の大きな魅力だと思います。

1964年東京オリンピックの思い出

菊地(敬称略) 1964年当時私は

中学1年生でした。50年が経過した今でも当時の感動は鮮明に覚えていますし、人生の中でも一番と言っているほど感動したイベントでした。私は小学生のときからアイスホッケーをしており、東京オリンピックを見て、「いつかは自分もオリンピックに」と思いながら活動していました。結局、オリンピック出場はかきませんでしたが、北海道の仲間がオリンピックに出場するなど「オリンピック」というものになりました。2020年のオリンピックでは、1964年当時に自分が感動したように、今の子ども達にその感動を味わわせてあげたいですね。

また、私はスポーツする上では「勝ち負け」の面白さ、美しさも重要であると思っています。スポーツが本源的に持つ「楽しさ」には「勝ち負け」による楽しさということも含まれていると思います。オリンピックでは、日本人が勝つ姿にぜひ感動していただきたいですし、勝利に向けて全力を尽くすことの良さも味わってほしいです。

師岡 私は当時小学5年生、10歳でした。4つの思い出があります。

1つ目は、1964年は観光目的のパスポートの発行が始まった「第二の開国」といえる年だったということですね。外国への関心が一気に高まり、東京オリンピックに参加する94の国名と国旗を覚え、わくわくしながら開会式

で一つ一つ確認したことを覚えています。

2つ目は、日本が豊かになっていくことを実感したことです。オリンピックの開催に向けて、例えば、給食の脱脂粉乳が牛乳になったり、東海道新幹線や首都高速道路が開通したり、ホテルが次々と建設されたりと、劇的に日本が変わっていく様子が見えた年でした。また、外で立小便をしないなど国際的なマナーを身につけたのも、オリンピックがきっかけで、国際標準でものを考えるようになったからだといえます。

3つ目は、世界中の選手が混然一体となり入場してきた閉会式です。戦後19年、まだ戦争に負けた悲哀の影を残す当時において、日本人の旗手を外国の選手達が担いで行進していくのをテレビで見たとき、「日本が世界に認められた」感激で涙が止まりませんでした。

4つ目は、ホッケーの試合を生で観戦したこと。私は世田谷区に住んでいたこともあり、駒沢オリンピック公園で行われた、観客数が少ないホッケーの観戦に動員されました。そのときに世界トップレベルの試合を間近に見て、そのプレーの素晴らしさに驚きました。当時の日本は、ほとんど「スポーツ＝野球」という時代で、サッカーですら観客席が埋まらなかったのです。世界には「多種多様なスポーツがあること」を実感したことを覚えて

います。

菊地 私は、オリンピック期間中に、地域の小中学生で国立競技場に国旗を掲揚しに行く手伝いをしたり、開会式の様子を見せてもらったりしました。また、自宅近くの甲州街道で男子マラソンをやっていたときにアベベ選手が走っている姿を見て、その人間離れした速さには驚きました。

師岡 当時は甲州街道ものどかで、治道を埋めた方々の中にはゴザを敷いたり、割烹着姿の女性も多く見受けられました。当時はまだそのような時代でしたね。

菊地 それからオリンピックを契機に街並みが劇的に変化していくのを見て、子どもながらに「これからどれだけ発展していくのだろう」とワクワクしていました。

